

190 180 170 160 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10

13
2897
6止

雲妙間兩夜月 六

電掣鼓雷聲
雨大兩頭電
觀音力彼急
散消得時在



本龜

福嶋屋

雲妙間雨月卷之五

東都曲亭馬琴編次

桑の真方蓬矢

昭和九年四月三日

福嶋屋

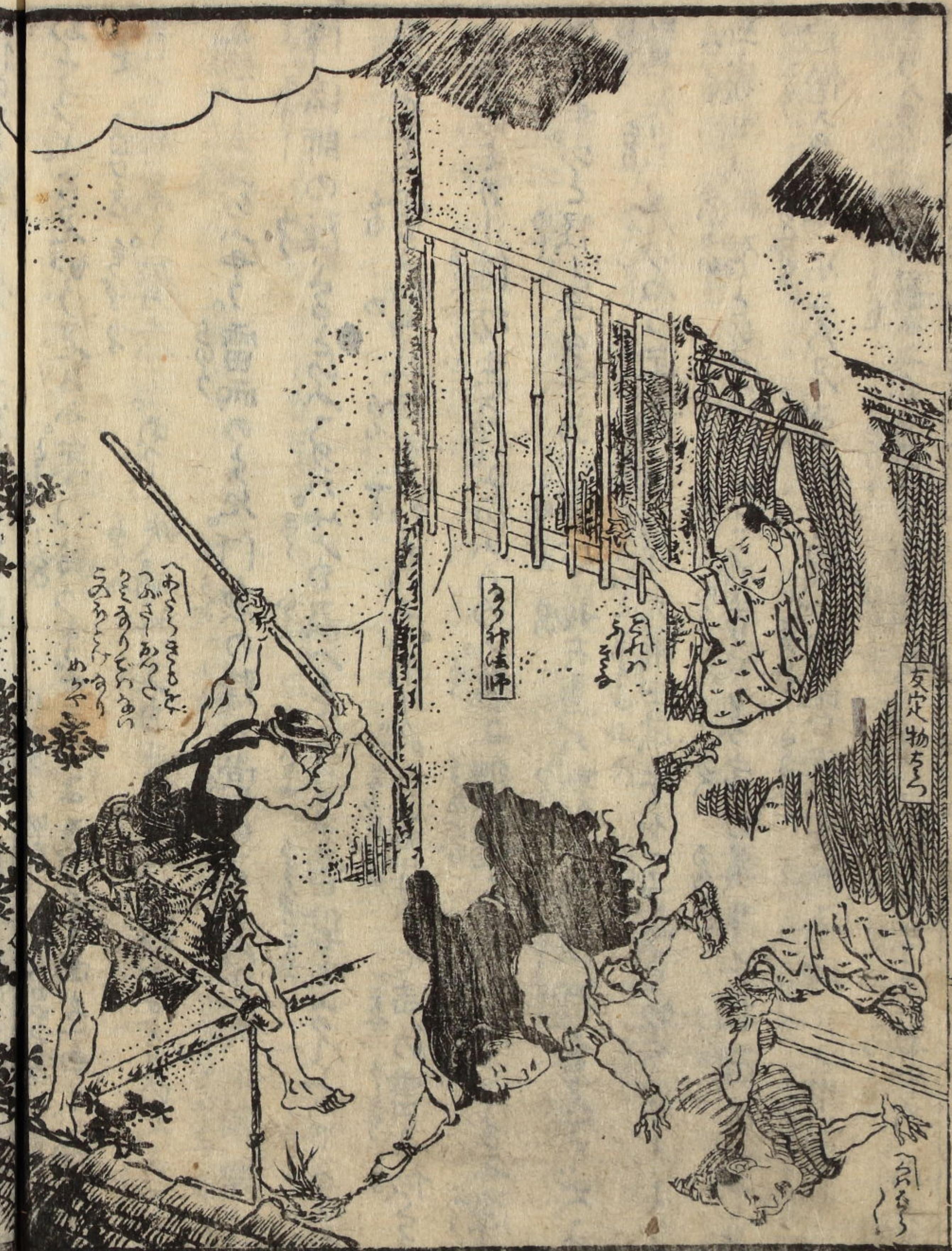
第十一套

延文二年五月四日の朝近江國愛智川武佐の間雷雨甚しく琵琶湖の水を巻き下すとあしくて船難さんど活えず雨又難りて降り。節供されど民間戸を垂らそ。瞬へ昨夜のやうふ釣もあらず。ゆきハ松葉折焼く。時々蚊火を燃らし。或へて云はれを聲く。昔門品を讀もう。と小僧の高賈友定物右邊へひめる年國司の威徳ふうておひつる黄牛をう。復一忽地又噴を附一多。今年う。牛の數も何く養殖。鹽を草津へ積送り。活業のう。ひく宜かり。さ。ふうふうの日は雷雨。牛小屋の屋棟を吹剥。牛へも直隠す。

ぬうふを。物右もつて慌忙た。牛牽の男どうぞ。屋の上より。塙薦と
膏うつく。雨漏を禦あめんとく。主従りと置かれて罵りやふおも。雷火
一發とも。車輪のどと天火頂の上ふ落かれて見え。直に屋棟を倒。彼
と。轍なる牛の間へ撞と落す音。天火を御音して。あそ一見どりふそうは。
え。駆を。彼黄牛へまとう。近曾駿の金をうそ。購ひに牛ども。五
七頭斃。うそを男どもへ忽地よ氣をうそ。屋棟うち滾落て背
至黽らうそめめり。そく中よ猛た牛牽ありて。これをそともせび。物
ありて棟板えう。著つ。雲々乗らんとまくを。鞭り矢庭よお落し。押
そく索をひく。ふぞくが。云々煙よ墨毛。かそく。絶え。そ
あうからう。さて雲散り。雷鳴もあさう。物右もつて人を医師の家
み歩く。迎え。火傷もるりの氣をじよひつ。下男下女木をえどる。
ふ。医師ハまどう。章きもろく。目今雲よ墨毛。暴雨ともよ零う。小舟
引流の中よあつて。立ちと反る。あそく。の下郎
うそすが。彼歎をり。ある。医師受うして昏倒する。胸の
上よ載う。歎へう。何をうそと反う。且くして死く。人云。といふ。蘇り。医
師られをえく。さむこと。かく。楊起が簡便かよ見え。参。歸。參
累。二三貼。腰用。うなじ。そのへこち清く。うそ。又雷火
門。五味子の四味を調合。それと。飲せ。と。下女連忙。煎ト
モ。二三貼。腰用。うなじ。そのへこち清く。うそ。又雷火
門。火傷あらゆりのふ。降真番を焼く。その烟ふ。燐もよ。溜汁竭て
立地よ乾き愈す。や。辛口。恙ひたすをうれども。物右もつ。事
ハ雷声よう。驚。聲と。また。がれのもの。治と。おゆうと。附子
一味を煎。ド用ひ。ふ。行生。云々。お常のどく。うそ。されど。耳

詫うて聽く。紙引び。之物右馬つが入る。ありひ考ぐて。武童を係
まし。累々いたる。前の悪報すゞ。物の劇をうそ。医師もうそて後、彼猛
き奴隸。物右馬つよりゆ。今朝の辯靈。多く。駿の牛を殺す。家自ら
聾とさりぬ。その餘のう。過半がトタリをえられど。僕不思議よ雷公
を生拘かをさう。やへこうふ仇を報ひゆ。ひとほく。のより。物をうそれ
を笑ふ。冷笑ひ。むり。朝夷三郎。和泉小次郎。えんどう。勇士也。雷公
を生拘し。とりひそば。笑ひ。傍へど。がるともみ。する戯言へいへぬりのぞ。と
ひ。諭。実すもせざりしへ。件の奴隸大よ焦燥。多く。あれ昔の
勇士よ傍見す。實言が虚言。あづるをとじひうけ。牛小屋よまつ
す。索。うりまよ。肩よ引。誓う。來う。そつとま。雷公ふくや。法師
す。立。落。うるうる。ひく。膳を打く。手。半死せる。ひく。を。衆皆
あそぶ。うえかうえふ。年。の。齡。うき。三十。又至。よ。面き白く。頬
青く。眉黒く。脣赤く。あひ。夫婦へひ。も。こ。う。き。う。れ。を見。う。り。の。大。よ。呆て
り。身。も。あ。い。ふ。や。雷雨の。うた。竹魚の降。へ常の。み。き。れ。ど。天地開闢。以
降。法師の降。うるとう。へ。や。め。及。び。ど。又。まよ。雷婆。うそ。と。ゆ。う。へ
ゆれど。そ。の。雲。よ。駕。り。雨。を。引。め。よ。あ。く。べ。口。置。く。て。声。の。雷。よ。似。く
を。う。の。み。う。海坊主。うそ。ど。う。ス。り。龍。よ。纏。揚。ら。と。小。魚。と。う。ふ。降
り。あ。や。う。と。怪。る。う。と。う。當。下。物。右。馬。つ。熟。と。う。法。師。そ。え。く。大。よ
鷲。を。見。え。り。ね。る。年。武。佐。の。鴉。夫。兩。田。武。平。が。一。子。み。く。い。こ。そ。や。く。う
生。家。せ。両。答。と。う。法。師。く。と。名。告。く。と。家。の。黄。牛。を。社。騙。う。う。かる
惡。僧。う。う。汝。ホ。う。へ。え。び。う。や。と。う。べ。衆。皆。掌。を。拍。そ。呵。く。と。笑。ひ。窓。よ
あ。う。う。這。奴。曩。裏。う。黄。牛。を。盜。去。う。今。又。夥。の。牛。を。殺。せ。う。あ。あ

支定物ちう



憎し。國司の館へ。縁由を訴え。とりとまつた。物右赤つが妻
へ。聾^{ひづき}。縁由を定め。安らぐなど。雷神を祀^{まつ}。物右
恨^{うらみ}。憤り。傍^{そば}。詛^{のぞ}。罵り。トバうち。撫^{なで}。物右
盡^{つく}。又。當^あ。村長^{むらお}。告る。ビ。それと。力^{ちから}。雷神を牛牽^{うし}。物右
了^{りよう}。觀音寺の城へ。とくらひ。彼^{かれ}此^この老弱^{ろうきよ}。や。傳^{つた}。雷公
の法師^{はざめし}。うう。立^{たて}。群^{ぐん}集^{しゆ}。とくらひ。端午の佳節^{うきやく}。
挿^さう。うう。ふ々々。この日。觀音寺の城。端午の佳節^{うきやく}。
佐^さ木^き家^けの諸臣^{しよしん}。主君^{しゆきん}。慶賀^{けいが}。退^{しりぞ}出^だ。山田信二郎^{やまとしんじろう}。塗通^{ぬりど}
も。亭午^{ちゆうご}の比^ひ。家^{いえ}。退^{しりぞ}。妙^{めう}。塗通^{ぬりど}の妻^{めう}の代^{だい}。主^{しゆ}。鎮守^{ちんし}
神社^{じんじゃ}。へ。清^{きよ}。祓^ほ。太^おら。塗通^{ぬりど}。佳節^{うきやく}の祝儀^{しゆぎ}。を述^{のべ}。出^だ
仕^{つか}の勞^{なぐさ}。向^{むか}慰^{なぐさ}。ふ。塗通^{ぬりど}。書院^{しょいん}の櫻類^{さくら}。飾^{かざ}。菖蒲^{あわ}。太刀^{たて}。弓矢^{ゆうし}
首鎧^{しゅがい}。を。指^さ。と。ちゆう。吉^{よし}。みゆく。端午^{こども}。首鎧^{しゅがい}。を。立^{たて}。矢首鎧^{やしゅがい}
や。る。す。ひ。寺院^{ていん}。尊氏^{そんじ}。卿^{けい}。兵馬^{ひょう}。の。權^{ごん}。を。立^{たて}。矢首鎧^{やしゅがい}。
吹^{ふき}鼓^が。を。鳴^なら^う。五^ご回^{かい}。五^ご色^{いろ}。相^あ反^{たん}。の。旗^{はた}。を。揚^あげ^る。互^{たが}。よ。先^さ後^ご。主^{しゆ}客^{きやく}。の。用^{よう}
手^て。桃^{もも}令^{れい}。後^ご凱旋^{凱旋}の景迹^{けいせき}。を。立^{たて}。と。愛^あした。例^{たと}。う。ふ。去^く。年^{ねん}。延文三年
四月十九日^{四月十九日}。塩尾三枝篇^{しおみつひん}。よ。え。え。う。或^も。死^し。ふ。也[。]。舍人^{しやじん}。親王^{しんのう}。の。夜^よ。す。供^う。ま。く。天^あ下^げ。の。脚^{あし}
尊氏^{そんじ}。薨^{こう}。ド。也[。]。新將軍^{しんじょうぐん}。茂塗^{もりぬき}。朝臣^{あそひ}。箕^{みの}。裘^{きぬ}。を。美^{うつく}。嗣^{つぐ}。天下^{あま}の。脚^{あし}
守^{まも}。つみ。う。と。と。演^{えん}。武草^{ぶくさ}。教^{きょう}。の。嘉^か。例^{れい}。憐^{れい}。急^{いそ}。と。ぐ。と。急^{いそ}。と。
仰^あ。と。と。と。と。か。と。塗通^{ぬりど}。が。と。と。教^{きょう}。と。隣臣^{りんしん}。も。と。と。う。草^{くさ}
教^{きょう}。の。起^{おき}。と。提^{さげ}。弓矢^{ゆうし}。首鎧^{しゅがい}。を。つ。と。う。教^{きょう}。と。不^ふ。可^か。れ。ば。弓矢^{ゆうし}。も。弓^{ゆみ}。の。り。の
み。あ。う。で。衆^{しゆ}。と。蓬^{ぼう}。と。う。と。遠^{とお}。ら。と。つ。ひ。や。へ。云^{いへ}。礼^{れい}。の。内則^{うちそく}。鶴林^{つるりん}。え。桑^{くわ}。張^ぱ。蓬^{ぼう}。矢^や
王^{おう}。露^ろ。等^う。等^う。魏^ゑ

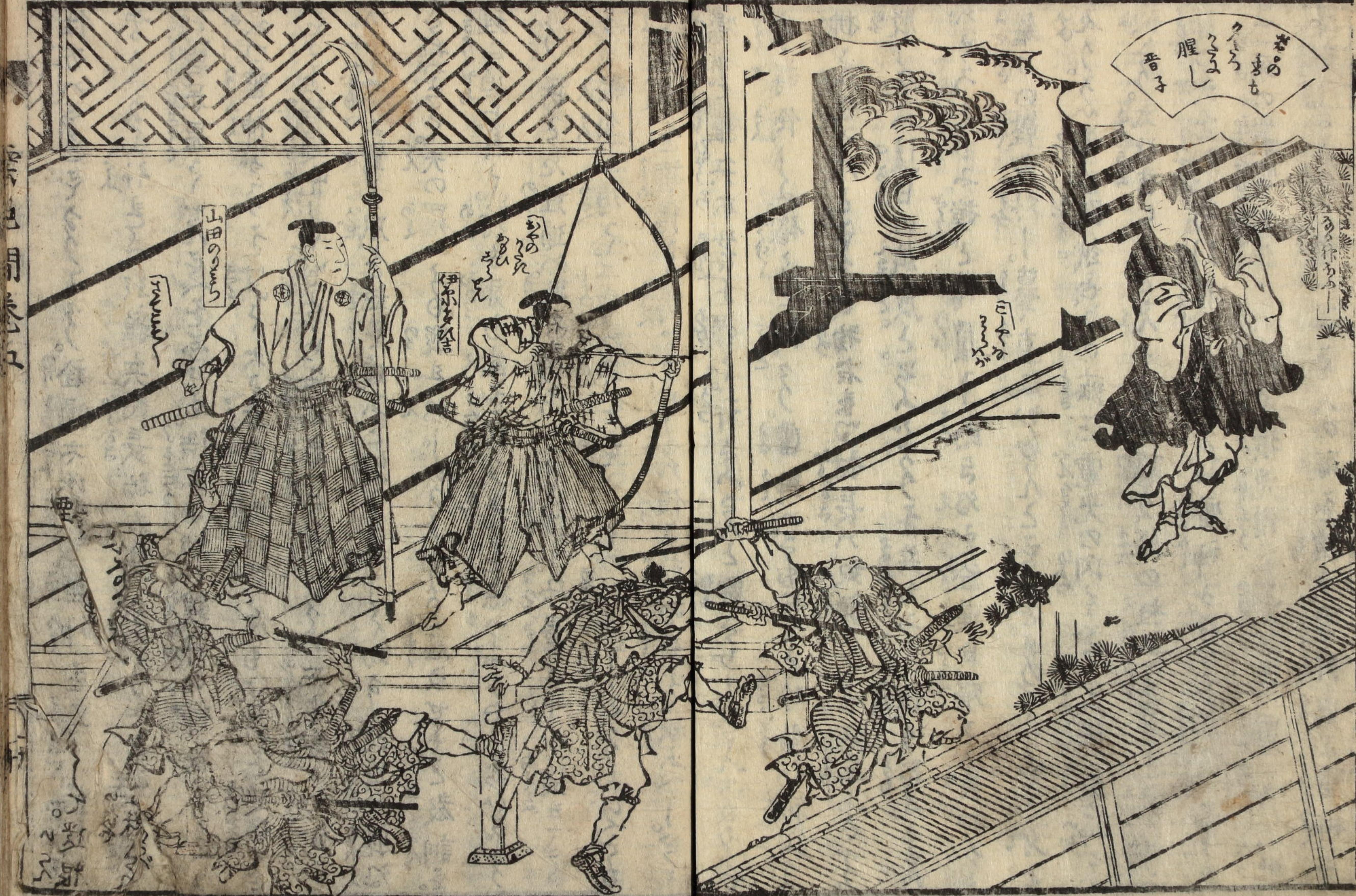
正德卷之三

子生もくられを耐え。かく四方の志あるを示し。その父母これを教
ふれを予しと算第一義とぞりへ。夫桑の神木あり。方書のみ功を稱す
もの最精細し。又一種山桑あり。桑は仙木。材弓弩箭ふ中るとひへりの
えをす。又蓬は禦乱の草とぞりへ。本草木下集解 とをりく。これこの
弓矢を節物とぞ。今日毎家よ菖蒲を菖蒲を押めたり。うとうと。
菖蒲へ蛇毒を解す功あり。又三種の草木。百邪を征らべ。あようす
家へ来と蓬の弓矢をりく。茱萸より代るのと。薦示よ太に吉にふく感
え。膝のきをあぐすての細を回んとる。おも。小幡乃
嘆き。膝のきをあぐすての細を回んとる。おも。小幡乃
家へ来と蓬の弓矢をりく。茱萸より代るのと。薦示よ太に吉にふく感
え。膝のきをあぐすての細を回んとる。おも。小幡乃
物右夷。所まよひのうらへ。とほ門つ。怪しごする法師を。ひく傳ふ
を。五三人の奴隸よ扛擔し。村長よりふれを縁頬の下よりとえ。皆
つひみく。うそやう。さすもの朝驟雨よ雷公ひく鳴く。物右夷つが
牛小屋のうふ落か。物右夷が妻ハ聾とす。その餘或へ昏倒或へ失
傷せり。のうじ。ども。幸み命恙す。もうふれする奴隸。乞う猛
くして。矢庭よ落する雷公を敲伏せ。遂に縛多きひが。こふ実の雷
公かへゆ。徃々西發法師と名告す。物右夷が家の黄牛を杜騙う
なる。惡僧す。怪しご死す。どもの落するとて。膽を打つる。醉
ゑがどく。向とも應ざせど。うち外うそ。訴ううそ。
ともも果ざるふ。トまち。とく又母の仇をうずれと。襷のそぞ結あ。一
おもかう。形勢うるを。栓通尻目よかく。これを止め。端ちう
立たつ。雷神をさんかう。物右夷。ホエイ。す。とのりの霊
とりも小墜。理外の奇談す。うそじ。別々故ゆべ。そんとされ
かりあり。徃々黄牛を奪ひ去る。惡僧す。は。是非を論む

お及びど。こうふ放一ぐゑを癖者あり。うえ逃一そとらひ渝。俄頃より雜兵五七人を以びてりやう。先僧昏絕とてうど。驚まば醒る。背をひり、打そえとらへ。雜兵ホうろをひく。一人突ひを握り固め。すこ声きりく。破と打ば。雷神困り。眼を瞬。見驚た且呆立。かひ惑へる氣色あり。がふぞーゆて。そもこれ。さば。あどかくハ縛るぞ。そのよと。塗通膝立す。刀を突立つ。雷神を信とみる。そりや。汝小憐する。物右取つ。牛小屋又墮。縛らむるをやうど。以あれ。汝いぬる年。物右盡つを欺く。黄牛を奪う。瀬田の二郎次郎。といふ。又賣ふ。彼を連累す。憐り。二郎次郎ハ妻を喪ひ。子又別れ。剝底食ふ。汝又撞見。直に取られ。娘と嫂を切害。

おう。足の脱きざれたをあく。領主よ訴え死を賜ひ。平ふる。す。九年。彼二郎次郎が兒子す。太白吉と名づけ。天官又切の仇を復えとぞ。日夜寝食を安うせど。その孝を天よ通じ。神明氣を憐る。居あらず。仇人よあらず。是、併汝が牛を盗むの惡報。ぬう。物衣あつよ生拘らる。天網へ遂に漏す。うそ。首状せよ。とりふ。太白吉ハ怒氣面よあらへ。刀の鞘を握り結て。雷神を今ひを下さる。國司の仰をあてがう。まわの先僧。瀬田の西院。號雷神と名づけ。天珠よ伏うとぞ罵る。雷神えを笑ふ。冷笑ひ。小ざうた童。が仇人。はづ。さす。どづく。ハ名告く。せん。りゆ。秋。神崎の狂女。蓮宗。よ隠す。まよ。をす

をひどく。ふゞ一故郷より立つて、小幡の商人を欺た。牛を奪ひ去
る。これを説張り換。簞食へかゝる。ゆゑに、箱根ぬくべ。下を走る
をえらん。まよ。まちとまよ。ゆゑに。お寺ド。お寺を住持せが。お寺
白雲黒雲よ會し。底倉の里人を汗束す。ゆゑに。寺は住持せが。お寺
も汝が又よ怒らす。そのうつ度覚す。彼地を脱き去。昨々観山の簞
を過る。雷獸の捕え夜をあつて。お寺ふ港をく。愛智川小幡の
向うへ。朝雨を降らる。奥より衆どく不覺よ雲を暗め。恨う
物を忿つが。们よ捕らる。とりどり。お寺をも肩とせど。況て黄
口孩兒。何ようとする。お寺が退り去る。と。範もくふ廣言。つて寺を起
せば。難兵ども。内へと闇くを足を起し。撲地と蹴倒す。続て
かくをあす拂ひ唱る。咒文よ奇する。縛の索もづく。放界
と出離す。もくアと満耳。詮通大よ怪しみ。そと溺れと魚
糸。象様倒す。破くと倒す。雷神へ。さもどもと冷笑ひ。袖す
揺す。雜兵木笠を揚ぐ。およふよんと群立ち。およふよんと
拵す。去らんとさるを。物衣表つ村長へ。奴隸ともよ立ち。およ
脱く。ほほ日の越度。と。およぞう。を共力みく。遡り曲んとさる
べりうとも。お。撻と轉覆す。動きなる。詮通焦燥す。長押す。
蘿刀の鞘を外す。轟直よサケンとさるを。りのく。やとおとおと
似す。太次吉うれをえよ大よ怒り。縁の柱よをくつ。桑の弓よ
蓬の矢を刺す。川度えとさるべ雷神が。ゆゑに。唱る咒文とも。
よ。一朵の叢雲忽然と天降す。被兎僧を。月裏。震霊。一声大蛇
を動す。と走る電へ。碎く人の眼を。云々。云々。云々。



往方へとどりよ。詮通大は。雷神を立て。迷恨
す。歩きて。雜兵村長物右衆木へゆりやく。蘇
ど。皆示果てせんとぐをゆす。浩承。妙ハ鎮守の神社。うりく
みつ。雷神がゆをゆく。大よ赤く。太に吉く。ゆよれを追當。と
まくを。詮通忙しく。ゆくぶや。汝志ひする。ゆす。惡僧既よ幻術を
りく。雲よ駕。一風を起。追ふとりく。も効く。功す。彼目今脱る
されば。よく。天の羅へ。も脱る。かすり。ども急々せそ。と教訓を
理よ。迫ら。もく。妙。ゆく。歯を切り。巻きを捺つ。ゆく。やく。もく。ゆく
う。そのよた。詮通。物右衆をちうへ。ゆく。汝曩。牛を盜みて
う。輕忽。ゆく。二郎次席を寛ぐ。もの過甚。ふく。とりく。ゆく。
又雷神を搦得。と。近き。ゆく。せり。僕。ゆく。前の過を贖ふべ。と。
退生。と。りひ懲せ。物右衆。大よ畏く。村長。よ。伴。牛牽の奴隸
木をねく。小幡。ぬく。賤の牛。殺。う。妻。聲と。う。金。活
業の便。をじ。く。奴隸。木。あ。ま。水の暇。を。う。物右衆。ゆく。劫
と肩。よ。當。う。僅。ゆ。塩の計賣。を。う。夫婦。辛。ト。露。命。と。驚。だ
しが。後。あ。ひ。り。ふ。う。り。ゆ。と。え。ち。る。人。も。あ。べ。う。ね。戒。べ。ー。物右衆。最
み。す。宴。の。訴。よ。う。て。武。章。を。連。累。ー。夫。婦。非。命。よ。死。ー。又。子。離。散
き。そ。の。難。苦。比。い。よ。め。す。痛。い。い。る。武。章。清。貪。慾。直。す。く。盜。賊
の。行。名。を。貪。り。う。を。り。天。人。と。共。よ。怒。り。う。物。右。衆。夫。婦。又。よ。う
殃。危。よ。更。よ。う。り。ぐ。ー。七。度。窓。く。人。を。疑。へ。と。り。世。俗。の。常。言。宣。き。ま
さ。る。行。ゆ。雷。神。ハ。火。火。の。術。を。う。城。の。東。す。岩。戸。山。よ。逝。去。う。頭。と
回。ら。と。彼。此。を。直。下。せ。ぐ。谷。蔭。う。煙。立ち。と。立。の。び。ま。不。雷。神。毛

を見ゆ。かる深山す。住む人へあらず。と見ゆ。ども。その煙を目當ふ。
サ一山を下まし。山賊とをばーと惡僧。只二人き。一向ひゆく。木の枝
を折焼つ。一壺の酒を燐るみをあく。それ。そのと。二人の惡僧へ足
音をつく。雷神を見えり。どうりうとう。吉備がとうふあるをもてて。
來ゆ。しつ。寔よそも。角會あり。とりへら。悪僧亦へ列入す。よ
白雲黒雲。うじく。雷神もふうへ。おび。ふれぬ。甚故あり。
汝木へえりの比。う。うふも。う住ぞと。同。二人。若き。吉備底食を
脱去う。とりへども。師又の往方をもくべ。ふぞー足柄山。脚き。若
せび。終。音耗。うき。被出されんと。陥。二人。りう
とも。東海道との。い。一昨日。山。よそへ。又。舊の山容と。うん
う。正。き。一壺の酒。師又を。ひ。べつ。あ。別後。情を述る。うかう。
まづ三盃を酌み。べーとり。ひも。ゆく。ねふ。雷神。酒の壺。く。と。谷底へ投
き。ふ。と。白雲黒雲。大小驚。た。あ。どう。吉備の好意を。か。化ふ。
あ。ゆ。へ。水飲。ご。飲。ご。飲。ご。もの。あ。ゆ。へ。理。す。これ。暗夜。鏡山の雷歎。奇
神。党。然。とう。ち。笑。う。さ。あ。ゆ。へ。理。す。これ。暗夜。鏡山の雷歎。奇
御。を。傳。授。せ。ト。き。雲。よ。駕。一。同。よ。御。を。隱。形。飛行。ハ。リ。く。も。モ。ト。う。
水脉。至。函泉。を。個。ら。と。み。を。え。く。と。只。漳。と。う。の。り。の。へ。き。と。酒
と。あ。み。り。陰酒。を。近。つ。て。ろ。う。と。み。を。え。く。と。只。漳。と。う。の。り。の。へ。き。と。酒
が。こ。一。汝木。も。慎。く。酒。を。ま。飲。そ。マ。グ。今。酒。を。燐。く。も。のみ。ゆ。く。と。謹
あ。め。示。一。多く。物。右。轟。が。為。ふ。生。捕。き。くる。る。觀音寺の。旅。中。あ。て。禱
の。索。を。脱。塗。通。が。蘿。刀。と。肩。と。せ。ざ。し。為。体。を。い。と。猛。く。燐。く。う
え。り。や。彼。二。郎。次。席。武。章。と。や。ん。が。兒。子。今。觀音寺の。城。中。

山田塗通が家より立。これを親の仇こと罵る。這奴木悉酒飯
を。とおひつふ。彼武章が児子太吉とす。とが禪桑の子を
立ひし。されと歎へぐ。その矢前を脱。立よ我主
。そりト。汝も汝も。不塗這奴木を世よめ。せきくほ安うべ。
す御をりく。城中の水壇を剣絶國司氏頼をそじめう。城中
の奴原と餓渴よ苦。一わけ人の恨を消。汝木とす里よいさと
のびゆ小調伏の祭器と買。かく。とその意と。懐。う
金三枚。すり。出。と投。よ。白雲黒雲一残。や。及。ご。ある
金一と應つ。金を。と。二人りうとも。ふ。き。う。き。次の日。主
く。唯備全く。整ひ。一。雷神へ。峯の上の瀑布。よ。注連。川。纏
り。からん。岩の上。堅。と。種。この供物を高札。ユ。並。き。よ
く。下。番。次。せ。ア。サ。て。雷神へ。と。天。地。を。礼。拜。一。口。よ。咒文。を。唱
え。續。續。と。宝。鐸。の。音。の。さ。う。と。幽。よ。笑。え。う。

第十二套

岩戸山の隠の糸

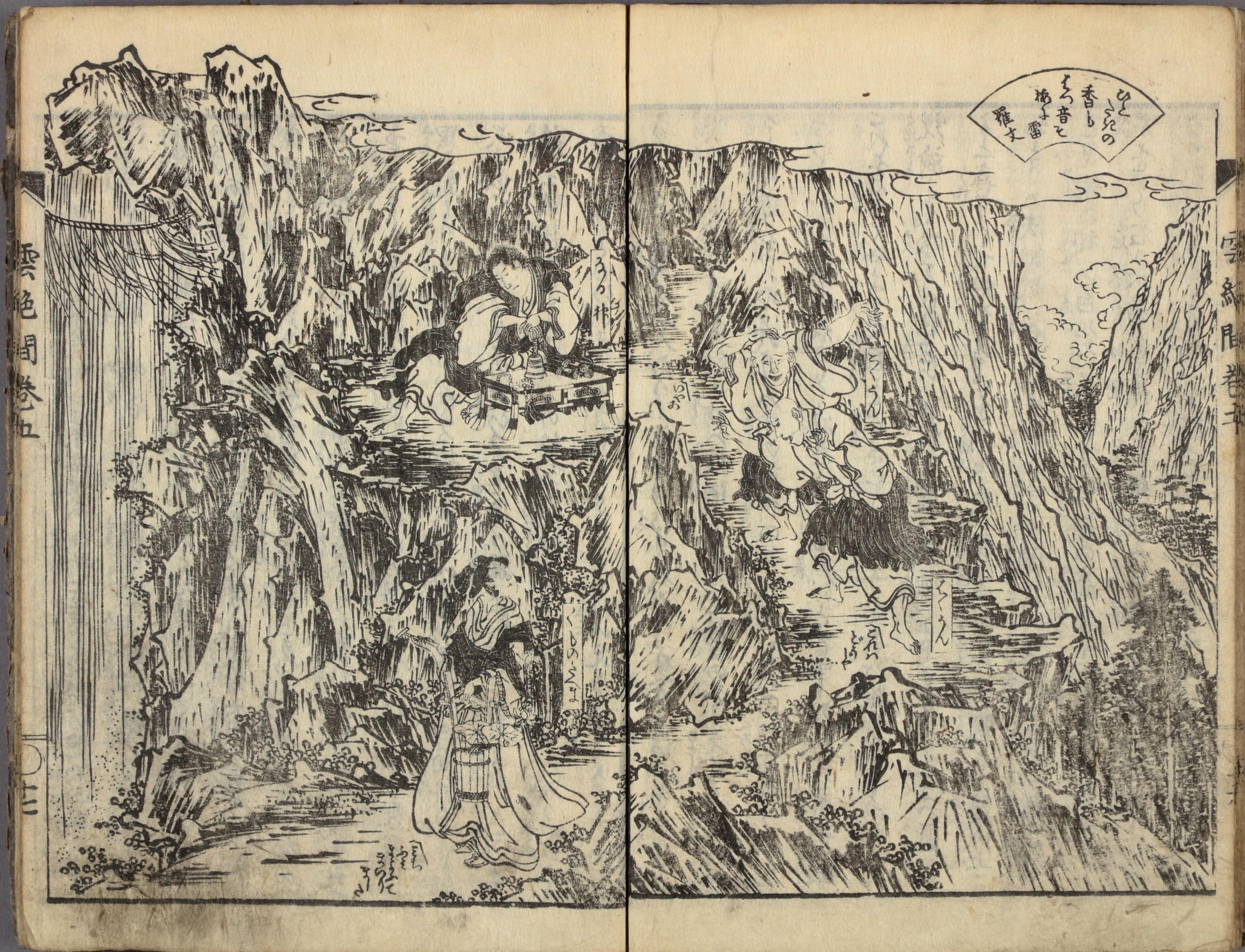
そもそも妙太吉。仇人雷神。を。打。り。と。遺恨。よ。想。ど。彼既。よ。幻術
を。な。く。能。行。自。在。され。が。忍。身。の。敵。み。よ。あ。と。只。の。う。へ。神。仙
の。冥。助。を。仰。だ。丹。誠。を。凝。ら。う。て。祈。願。一。身。の。外。あ。る。が。う。う。い
く。同。胞。志。を。ひ。く。し。と。城。外。の。觀。音。堂。よ。猪。う。大。慈。大。悲



の冥助を禱り。又父母の灵位を拜し。心中の鬱憤を訴る。
久さ。雪の山 鶴塚より。塚は猪もべ。日も月も西よりみたす。夏艸の繁
茂よがよヌテ風よ。螢三ツ四ツ吹ゆ。葛らしく。晝の暑さとそりて。ひる
おぞせしる。かく。同胞の塚の傍よ櫻を挿。石傍と掬う。念
仏十遍ぞ。やう唱つ。すすり声を起さんと見えん。年紀二八ぞう
うる美女。白衣單衣の袖長きと見ゆ。黒髪をつゝ乱れ。物あり
き氣色ふく。立在るが妙。太ひ吉とほどと見えりや。痛いや。孝ふ
類うく。おせじぬ過失あへりとそや又母と喪ひく。その艱苦よ面
憔悴うす。されど嬾まう。今あじが福う。煮ゆく雷神の城外の岩
戸山ゆ。彼寺跡となり。城中の水壇と云。國司よ冠だんと計被
ア。との術を破りん。さて酒とふくらひのほ。さればとて佻へく近づ
ゆる。六箇舎く。計策。大功をうこゆ。一とそ審議よ。謀を説示
し。又觀学する小像と一面の鏡を妙に授けり。すと像へ。往昔記音
寺の卒持佛うるが。彼寺頽廢の後えへく。土中よ埋まひ。ひそ同胞
至孝みあら。ゆうび出現ふまへ。これをちうとて。山よ登る。万よ一首
過あるべ。えど鏡へとへが為ゆ。主うかる。左席立武泰均の妻
よ。し。神崎の姫女蓮繁が彼里よめり。と。雷神よ贈まう。之
うれきり。尋引ゆ。雷神うあ。計策の踪よ入り。勢疑ひを
さへ。と。は。恨みしきと叮嚀よ。すえあつて。塚の後よ入ると見え
團の燐火發と燃形へ消えう。う。妙。太ひ吉。忙然として。あや
面をあら。彼へ歸ふべうもの。雪の山が亡魂きりよそ。頗る感傷とお
ゆ。彼是も死してう。母が爲よ忠あり。その志人よ勝きと遠い。嗚乎

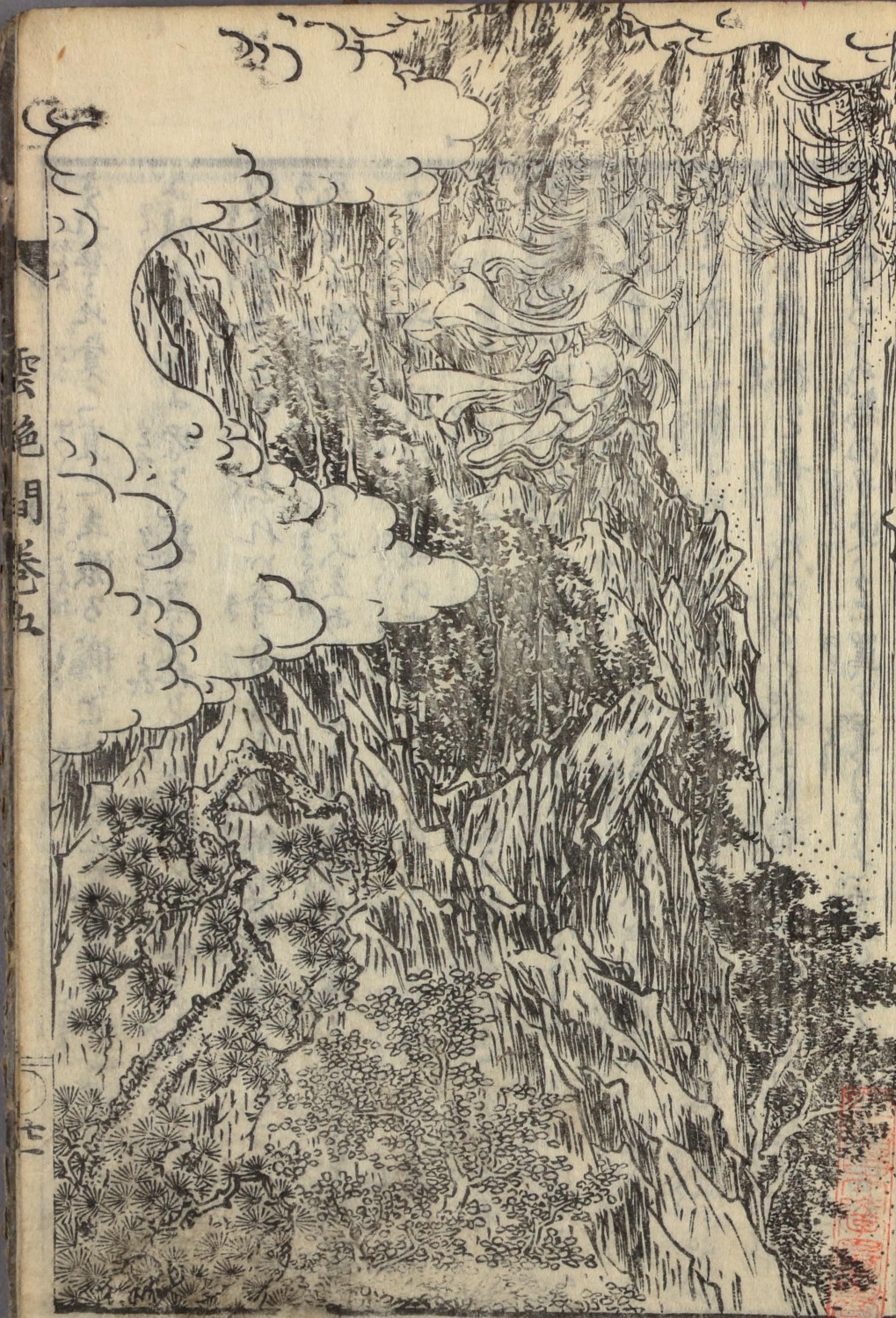
奇きううと嘆賞してゆび鷹の塚を拜し。遂に觀音と續と懷ま
して城中ふ立つて、詮通と縁由を告ひられば、詮通はく。ふく。鷲嘆
因故うりへ土中出現する像む。觀音寺の本尊すく。
至るべ。郊外の小堂より置あるべたがゆう。今立地は雷神が在るを有る
と。さうの御仏の灵験ふらそと稱嘆し。やが國司は祈うえとそ。その
夜俄頃より仕へ。主君氏頼より件の一五二十を笑えあげり。氏頼
大々驚き。城中より水引く。忌みて大驚き。汝もや。娘。木
ひ吉を扶く。彼惡僧を退治せよ。又駿の勇士より命じ。彼山乃
木方とく。其廉みせよ。とく。准備せよ。と仰られば。詮通禪く。うけゆく。お
て家より退た。妙太郎吉より國司の仰を笑えらじ。俄頃より准備を
いたる。リヨリ次日妙へ黒髪を剪て。所警護より垂丘の形狀と
木を握り。雌良み花桶とり持。朝より山へ。城を出る。といひ
岩戸山へ赴く。太次吉へ詮通とも腹巻より腰當。蓑と
笠をふく。樵夫の山梅より俸より折。妙が跡と跟て。あく
山路を登り。花桶と挽鉢を鳴らし。觀音の宝号と唱つ。岩戸山へ攀登
程よ。妙へ花桶と挽鉢を鳴らし。觀音の宝号と唱つ。岩戸山へ攀登
程よ。深谷地を帶く。崖岸の形を鑿穿。高嶺天より横り。岡峦の
勢を刀削。煙霞泉石分明。天より奇妙。是の峯より先
たり。日ひ照り木の下暗く。細々葛より繋り。松柏の巖より登り。

長き蘿よ憑て。桃源の間よ至る。向上ば青壁萬尋うて。眼よ遙
 けく。直下ば碧石潭千仞うく。とゞく神を傷らむ。羊腸うる前路よ
 胸を抱一且くハ背よ玉うきと行を侵へ。離くゝる荆棘よ足を纏られ
 ハ裳を紅の血よ引ひ。辛じく登すゆ。夜よ聆く愁うく幽よ宝澤
 音とうう。さて彼處も雷神が籠まる。巖うきとあくよ邊の連
 えあ。すその所よ到じく。白雲黒雲えとえく。左右うり遠田樵
 夫炭焼の翁とりども。うそぞへ登り、外うきとす。あらざやの峯へ三
 宝の天巖。金仙の幽栖みく。女人を禁止と。うく簾へとまう。と
 いとあらずすふりひ渝せば。妙に莞然とうち笑ふ。こく女子の才ふー
 ゆれど。かく佛の心才ふう。笑く近僧人を索く。彼此の高峯よ
 登す。けむりのを。せうづよゆく。彼處よすずゆる宝澤の音うそ。
 あはふく。蘿ゆ。人ゆうとえあう。けうぬ。あうゆう。とり人よ。自雲黒
 雲笑ゆ。びらはア師の坊へ陰酒を見ると讐言のふ。え東女人よ慕
 う。青道みやくわよ。やハ木の端竹の折。深山しぐれの朽木うづく。虚
 けり。やくためえよ。さくと罵る声りと置草。けじく。雷神遙
 えれを笑ふ。ゆえモ。理を尽くさむとて。女子を打べ恨むべ。見え面あら
 説諭く。笑えりのを。とりふ声の。深を狹霧よ見ええつう。ア雷神
 うと喜く。妙なぞうと向よ。白檻の高巖を空方うべ。嵐の端よ
 き括緒の袴の白をゑどあ。白檻の高巖を空方うべ。嵐の端よ
 帽をか。右よ水晶の念珠を丸繩。左よ清洞の宝澤と揮鳴し。聞
 うる段のモ。すわう。伸く。枝うぐ栗をえよ似す。荒薦布たる



卷之三

風は吹かぬ。かの娘と咲たつ。それをおれもられも又憎下と
參り。さう揚ひどく。誰をさう氣へ。がれどもとまされ。わる巻螺
湖水より。あべらじて進へせん。とりひ紛りて立去り。木からきを
目送る。雷神又妙とえりて。ひよ雲の妙とくやん。いおう夫の像
見て。ところをつゝ鏡へ。行とやんこう帽。今一トうびえせゆく。うべと
振りそよご。恨へうと鏡。死へうとま。知どそ。くらんとぢうが雷神
へ空を廻る。阿と叫び。あくび撲滅と倒す。妙の筋ろり。からて。巻桶
ある酒を数回。雷神がほに伏だされ。うぶ。うど。飲味酒の身。あまき
小碎取て。遂よ破る。火炎の術。巖よそく。火雷神の画像より吹生
る。急地發火と燃らをさう。ちかく課。うのみ向す。妙の巒を引あ
げく。張弓落る。龍津弾。侍とえあくればこそ。うれ。ね十丈ある
巖の底。引廻らる。住連を。りすす。切捨ん。劍は。と々とく。深山
か一。え
風の吹き。さう。さう。はやく。うるる。の声。りう。とひよ。一圓の輝火。西
巖の底。引廻らる。住連を。りすす。切捨ん。劍は。と々とく。深山
か一。え
色く。云鳥す。し。濡れを厭ひ。裾端。一。嵩よ縁。まと。ゆく。登り
結ふ。若鮎と。見え。見光く。准備の懷劍。すくと。抜く。住連の
真中下と切捨。天袖。と結陰。降ら。雨の限の藤を乱す。
異う。電光うち。山鳴。動りぬ。雄く。足歩。が
髪。う。乱。ちぢ。念す。普門品。これ。雲雷鼓掣電。降。電廟
大雨觀音刀の。実驗。さむ。見え。せ。と。祈清。逆手。天帝。巖室
の。あく。一。因り。一。瓶。わ。め。が。輝く。妙が懷。と。度と。懲。出。又舊の
函を。れて。ぞ。おま。と。ね。と。おまく。ビ。と。取。う。り。雷神。の。雨。お。起



され驚いた覺て直と立。張る籠を傍とえど。まことに少女は謀られたり。あ
る腹ほど大よ喰ふ。葛直よがりうるを。妙にまことに氣きもある。觀世音
の尊像を。とさへあれば奇うる。雷神忽化も足徧く。とりど
飛虎よ撲地と坐す。ス立あぐらんとまろおーも。誰とへあくど。樹蔭
うり打牛と洗濯す。額の真中打碎られ。さうりの兎傍うり果て仰さ
すよ仰せたり。浩然よ次吉。途通と共よ腹巻の上よ蓑笠着て自
雲黒、雲々が首を。さりの降よつゝれた。樹蔭うりあくわれぬづく小雷
神。いのり日観音寺の城中より。名古にあふらる。武章が鬼子伊原左
次吉を懲す。鶯小恩人山田経通ぬ。ともかよ。二人の惡僧を誅戮す。ふ
婦体が魔術と折く代をくく。今こそ宿志を遂るあれ天四討凶罰が
りしむり。怨の刃受と罵り。さうして首をあぐらとす小雷神へば
ゆき夢の贋見。うるか持し。すよね内へり。びとすよと叫び。身を起して嘆
息す。それ幼より空門よ入す。父母の菩提を吊んとぞうみ。妻亦やの鹿小
妾想斐まで。俗子よ捲る罪犯を怨れど。差夫迷うるか。今や煩惱
の雲晴れ。真如の月を。見えど喜びと讐悔。妙に燒きをひと
つす。籠壺よ撲地と投へれ。高野大師十喻第七。水月喻の句を听せし。
桂影園ヒ寥廓飛
法身寂ヒ大空住
水中圓鏡是僞物
如ヒ不動爲人說
听ドア合掌す。ひさ立すと父母の怨を復へ。南岳深院弘
と念されば。ごうのうと立て。父母の怨を復へ。南岳深院弘



かくて妙を以て。士官の達通とももふ。梵麗よ下まで。勇士ホヨ會日。まみつれともちと
觀音寺の事よまうす。國司氏頼よ復讐言のる体を以てあげし。氏頼ハ被
同胞が此度の功績を褒賞ありて。よづく引出物穀あり。且親世音の
利益雪の山が忠魂を稱贊。新ニ數間の堂宇を建立て。彼觀世
音を安置。祈願所よせばだはしき。汝えあじ。次の月伴の同胞小。達通
を副て底倉へ遣。武章が灵墳を祀ら。又。する程よ妙ち。吉。國
司の恩を拜謝して。達通よ伴。日を發て相列底倉。到着。父の
墓よ訪。名寺よ。穀の施物を寄進。且木賀光浦よ。又。桑志
。仇討のる紙告よ。されば。光浦。又。その純孝を感。激。て。さ。次告
。又。切草のみを物う。その種を附属。て。ある飼のみを付授。セリ。
ら。よ至。底倉の里人ホ。さ。い。よ。雷神が奸惡をありて。武章をいと
惜。その子ともの孝。比類。さんを嘆。嘗見。と。また。達通。妙を次告を
い。近に。ゆり。り。室町殿。彼同胞が。を。汝食ひ。ぶ。れ。た。に。口。無
く。詞のとよ。う。た。よ。し。され。と。氏頼。よ。仰。し。られ。を。浴。辰。の。が。其。國。松。箇
所。を。あ。つ。そ。近。臣。よ。ア。加。み。ふ。う。と。を。び。古。り。財。を。も。浴。辰。の。が。其。國。松。箇
武士。よ。婚。縁。を。結。せん。と。そ。達通。と。カ。よ。み。の。の。を。相。給。一。が。妙。ハ。麻。リ
氣。き。あ。く。仇。人。雷。神。が。幼。御。を。破。る。謀。よ。も。め。れ。と。が。お。一。と。び。改。鬚。を。切
法衣を著。す。よ。今。さ。ら。人の妻。と。の。ん。と。還俗の尼。よ。ほ。し。か。べ。や。く
長く。象。教。よ。か。を。委。ね。父。母。の。苦。提。を。吊。ん。と。と。願。り。れ。と。そ。り。よ
む。か。を。う。き。す。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か。が。う。か
勧。れ。と。ち。の。聽。ど。遂。よ。祝。髮。受。戒。て。妙。雲。尼。を。り。そ。彼。堂。を。守。と。堂。料。を。あ。佈
成。就。ち。ひ。しづ。氏。頼。ア。と。妙。雲。尼。を。り。そ。彼。堂。を。守。と。堂。料。を。あ。佈
ク。あ。る。ふ。そ。の。夜。氏。頼。達通。妙。雲。尼。を。ひ。吉。ホ。う。夏。よ。親。世。音。告。て。宣。く。

しし岩戸山より五色の鹿あり。又み山より雪山となりゆく門あり。觀音は再興の大願を發し。日夜普門品を流経せり。件の鹿流経の声をすて。感佩隨喜し。遂に雪山が草庵のはとりを去らど。あらうるる猿夫雨田武平。それを見て。うづ普門品を読むひゆ。且雪山が庵よりを窺ひ。其處より五六町を隔たる。谷蔭より到り。弓矢を伏て普門品を読む。五色の鹿流経の声よりきく。彼谷蔭より未よる代。武平忽ちよ射て。その皮を剥落よ推引。かれてよれ價より。行焉らんと。折一も武泰武章が父伊鷹武俊とひの。新田氏光よ従ひて。京都より。武平が鹿はをとて。數十金をりて。それを購。ぞと行勝にて祕藏。り。との業因是彼よ及びて。鴉夫武平。うづ奇病よ係よと世を去。その雷神法師。妻はが鹿の声をすて。堕落し。且物をうそ旅らんと。畜生をえありと稱し。又武義出章夫婦ハ横死す。されば彼五色の鹿へ。神崎の蓮葉と生れて。雷神が道ひを信。義孝れを憐り。それが乃よ身を殺し。親音寺の奉ね仏を土中うず掘出さして。堂宇建立の宿願を果せり。又小幡の物をうがえへ。その比縫よりて。件の鹿のはを媒し。武俊よ買ひて。あらん。利をひたる。うづの。うづ。雷神ようじ。その子物を。雷神よ牛を盜まれ。又武章を寛ぎの身を修む。零落し。とみ是脱れぐゑ因果ある。くよやうて前生の惡報竭る。娘女次吉が巨孝。親の冤を雪るのうべ。雷神も又巣期よ悟道せり。あらう。瓊山の雷獸闇よ雷神法師を備ひて。雨を降さし。幼術を付授して。桀伐轉ふるを。并がて罪犯ある。えよ。近々よられを罰せう。のあらぐれ。と告ぬふとう。見て後互よこれ

を終り。秀吉も違ひ。かくて次の日。木椎二人。覺山よみがへう。小雷
雨猛よ烈。一ノレしき。老樹の虛よ伏して。雨を避。雷声あまき。雨霧う
をきらし。すゑ路よゆくとす。え剣さる獸二頭。龍よ纏きてる
より。腹のあくろ細すよ縊れ。頭碑そ木杪よやれど。未曾有の事
さればと。樵夫ホヤリあひ。扛そ參て圓司へ所まうせう。氏賴はさ
ら。経通妙雲尼同胞。これをえんじ。されば親世音の示現空う。う
雷神法師よ奇術を授。雷獸。神龍の纏殺。したまゆりと。
うちく善惡無報の錯ざるをめ。忠孝の志を励む。妙雲尼
の道心は堅。四十餘歳の長寿をうらち。吉の経通が其恩
を娶ること。よとも夥舉。子孫足利家よ仕。その家あく榮焉とする
雲妙間雨夜月。卷之五 終 本尊

林書

京都寺町通佛光寺 河内屋藤四郎
芦日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 芝丁目 山城屋佐兵衛
同 司南傳馬町壹丁目 須原屋新兵衛
同 下谷御成道 英文 藏
同 大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
大忍齋福筋本町角 和泉屋吉兵衛
大忍齋福筋本町角 河内屋藤兵衛
大忍齋福筋本町角 河内屋茂兵衛板

